



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	明治30年代における教育関係者の地域のことばをめぐる議論と「国語」形成：東北地方（主に岩手県）の教育雑誌にもとづいて〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	小島, 千裕
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	甲第13975号
Issue Date	2020-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/78678
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Chihiro_Kojima_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（教育学） 氏名：小島 千裕

	主査	教授	近藤	健一郎
審査委員	副査	准教授	大竹	政美
	副査	教授	浅川	和幸
	副査	教授	大野	眞男（岩手大学教育学部）

学位論文題名

明治 30 年代における教育関係者の地域のことばをめぐる議論と「国語」形成
—東北地方（主に岩手県）の教育雑誌にもとづいて—

本論文は、日本における国民国家形成過程での話し言葉に関する教育に注目して、「訛音矯正」などに顕著な特徴の見られる東北地方、とくに岩手県を対象地域とし、国語調査委員会の設置(明治 35 (1902) 年)や尋常小学校での国定国語読本の使用開始(明治 37 (1904) 年)などが行なわれた明治 30 年代(1897～1906 年)を対象時期として、教育関係者が地域のことばをどのようにとらえ、学校でどのように「矯正」しようとしたのか、それはこの時期の国語政策とどのようにかわるのかを解明するものである。

国語学者や文部省の施策に注目するのではなく、岩手県の小学校教員、またその養成にあたる師範学校教員や、その指導にあたる郡視学など、地域の教育関係者に注目することが、本論文の研究視角である。教育関係雑誌の掲載する記事には、教育関係者の地域のことばに関する見解や調査報告、また学校での話し言葉に関する教育実践の方針や方策を記した論考も含まれており、本論文はとくに『岩手学事彙報』の丹念な調査と検討に基づき展開されている。

具体的な構成と内容および成果は次の通りである。

第 1 章「岩手県における教育関係者のことばの認識」では、岩手県の小学校教員等が、地域のことばや「国語」をどのようにとらえていたのかを課題とした。その方法として、明治 30 年代の『岩手学事彙報』に掲載されている記事一覧を作成し、地域のことばをめぐる議論を整理した。それにより、明治 32 年(1899 年)に岩手県が岩手県連合教育会に「児童の言語及風儀に関し矯正するものは如何」との諮問を発した際、種々の疑義が呈せられ、明治 34 年(1901 年)に答申がなされたように、小学校教員等は地域のことばを全面的に

矯正しようとは考えていなかったが、広く通じることばを思い描き、それに照らして矯正する部分を指摘し、改良を施そうと考えていたことを導いた。

第2章「岩手県の小学校教育における地域のことばの矯正方針・方策」では、岩手県師範学校ならびに附属小学校での方針をふまえつつ、その他の小学校におけることばの矯正の方針とその具体的な方策について、主に『岩手学事彙報』に基づいて明らかにすることを課題とした。岩手県師範学校は、全国的な動向をふまえつつ、国定教科書が編纂される以前から正確な発音を重視し、初学年児童への配慮のもと教育課程全体を通じて標準語をめざす方針を示した。それを受けて、岩手県内の小学校では、台本を用いた対話実践などの方法が採られており、国語科をはじめ作法等ともかかわりながら、学校生活全体で身につけるべきことばを教えていた。そのような学校での教育活動は必ずしも地域のことばの矯正を意図したものではなかったが、それが地域のことばの矯正、そして「国語」へと通じていったことを明らかにした。

第3章「東北各県におけることばの認識と矯正方針・方策」では、第1章と第2章で描いた教員等が地域のことばを見つめることが結果として「国語」形成の方向性へ通じていくということについて、他県との比較によって検証すべく、東北地方各県を対象として調査検討したものである。基本史料は『山形県教育雑誌』をはじめとする各県教育雑誌であり、それらの調査を通じて、岩手県と類似する状況を明らかにした。

本論文は以上の各章を通じて、明治30年代における話しことばの統一を志向する「国語」形成について、文部省等政策側の考える「国語」に一致させられることではなく、統一された「国語」を見すえつつ、地域の言語状況や子どもの学習実態をふまえてなされる学校の取り組みが、ことばを形作り、地域のことばを「国語」に近づけていくこととなったという歴史像を描き出した。

本論文の学術的な特徴を、関連する今後の展開の可能性とともに指摘すれば、以下の通りである。第一は、上田万年をはじめとする国語学者や文部省の政策によるトップダウンの急進的な国語史像に対して、小学校教員等が地域のことばの難点に目を向けたり、学校生活で身につけるべきことばを教えたりする、いわばボトムアップの要素を強くもつ漸進的で地域の言語事情も反映した複合的な国語形成史像を描いたことである。今後、小学校教員等が地域のことばをとらえることが「国語」形成につながっていく歴史的事情について、岩手県の教育の事情や課題とのかかわり、国語政策や教育政策の影響等の点から深めることが求められる。第二は、『岩手学事彙報』の丹念な調査に基づき、小学校教員等の考えたことや取り組んだことを叙述したことである。ことばを主題とする記事にとどまらず、ことばにわずかにしか言及していないものをも調査収集していることは、特筆に値する。今後、人物や学校とのかかわり、記事の言及する学校での教育実践史料などの追加調査により、それらの記事を多面的に位置づけていくことも期待される。

以上の成果に基づき、著者を北海道大学博士（教育学）の学位を授与される資格がある者と認める。